

# 森鷗外『牛鍋』の再解釈

——「渴してゐる目」の真意——

序

三島由紀夫は随筆「鷗外の短編小説」<sup>1)</sup>の中でその題目通り、森鷗外の短編小説を「知的な乾燥度の高い文体と、その無造作な語り方」、「どの一篇をとつても、模して及ばぬものばかり」と絶賛している。

三好行雄が編者である『近代文学注釈体系・森鷗外』（有精堂出版一九六六・二）には、森鷗外こと森林太郎が生涯を通して執筆した作品に関して、史伝を別にして彼の執筆した作品は全部で七十編たらずであり、そのなかでも長編と呼ばれる作品は三編しかない。他はことごとく短編および中編である、と記されている。

本稿はその多数の短編群の中から、鷗外の文壇復帰後に執筆された、文字数から鑑みても短編中の短編といえるであろう、『牛鍋』（初出：明四三・一『心の花』）を考察していく。

しかし、二〇一二年現在までで存在する森鷗外『牛鍋』に関する作品論は、三好行雄の『牛鍋』（『国文学』学燈社 一九七三・八、小泉浩一郎の『森鷗外「牛鍋」』（『国文学』学燈社 一九八四・三）の二本のみである。

有賀ひとみ

まず、『牛鍋』の梗概を次に記しておく。

牛鍋屋で牛鍋を囲む、〈女〉と〈女の亡夫との間にできた娘〉と〈女の亡夫の友人である男〉が登場人物である。旺盛に牛鍋を食す男とそれに負けじと小さな肉片をつかもうとする我が子たちとは対照的に〈女〉は鍋には手をつけず我が子にも目もくれずに、〈男〉へ「永遠に渴してゐる」視線を送り続ける。〈男〉と〈娘〉の食の争いの様子は猿の親子にたとえられ、「人は猿よりも進化してゐる」という言葉で小説の幕はとじる。

冒頭で触れた三好・小泉両論文に共通している解釈がある。それは〈女〉に関する解釈である。彼らの解釈によれば、〈女〉の〈女の亡夫の友人である男〉へ送られる、「永遠に渴してゐる目」は〈女の〈男〉への性欲のまなざしとされている。小泉に至っては、「性欲のために食欲をも母性愛をも忘れた永遠の女性像を刻み込む」とまで論じている。『牛鍋』に触れている論文も三本程度は存在しているが、それらも未だ、三好・小泉論文に共通している解釈を出てはいない。

また、これらの論文で論じられていない部分として、「一の本能は他の本能を犠牲にする。」「人は猿よりも進化してゐる。」という文章の解釈が挙げられる。

繰り返すが、『牛鍋』論文の論者たちは皆、「永遠に渴してゐる目」は〈女〉の〈男〉への性的な欲望を向けたままざしであると解釈しきつてしまつてゐる。

果たして本当に「渴してゐる目」という描写が含んでいるのは〈男〉への性欲や情念だけなのだろうか。それらだけを含んでいる視線と仮定するにしても、なぜ永遠に満たされないのか。

三好・小泉論文と同じく、論理的に考察されていないように思われる解釈が多く、学者の間で横行しているという事実が意味すること、読み手の解釈が一義的になつてしまつてゐること、これらの意味を、〈女〉の「永遠に渴してゐる目」の再解釈によつて検証することを、本稿の一番の重大な目的としつつ、従来の論文で語ること避けられてきたようにも思える、作中で繰り返される「本能」という語句と「人は猿よりも進化してゐる」という文章の意味にも注目し、『牛鍋』を〈牛鍋屋という舞台〉〈人物〉〈語句〉の大きく三つの項目に分け、細部にこだわつて『牛鍋』の解釈を試みた。

— 1 —

まず、『牛鍋』の作品時代の大まかな特定をするために、主に牛鍋屋の歴史、そして登場人物たちの様子からそれを考察する。

そもそも日本では主に仏教の影響から、動物の肉を食べることは決して歓迎されることではなかつた。牛鍋屋が初めて日本に登場す

るのが文久二年、江戸末期のことである。仮名垣魯文の『安愚楽鍋』（明治三〜四年）には動物の肉を食べることを「あくものぐひ」と称している場面もある。

しかし牛鍋屋は明治三〜五年頃から大流行することとなる。その流行の裏には欧米列強を目標に据えた富国強兵を意識している明治政府が大きくかわつてゐた。明治五年には明治天皇自ら牛肉を食し、僧侶の肉食妻帯も許された。さらに福沢諭吉の『肉食の説』（明治三年）によつて、牛乳と牛肉が衛生的で栄養のある食べ物であるという説が普及すると、牛鍋を食することが「西洋の最新の学問『究理学』を理解した開明的な人物、滋養と衛生とに心を配る、食生活に対する意識の高い人物の行動」となつていった。

こうして、肉食に対する穢れのイメージは急速に取り払われていくことになる。以上のことに加え、魯文の『安愚楽鍋』に描かれてゐるさまざまな階層の人物から、牛鍋は庶民にも十分手が届く食べ物であつたことがうかがえる。

そして明治十年代末になると、坪内逍遙作『当世書生気質』での牛鍋の登場の仕方からわかるように、当初の「開明的」なイメージからの「牛鍋を食べることへの特別な思い入れ」がなくなり、もつぱら安くてうまい食べ物として認識されるようになった。夏目漱石作『三四郎』からも牛鍋屋は「貧乏学生が出入りする」ような飲食店へ変化したことがうかがえる。<sup>3)</sup>

ちなみに『牛鍋』の〈男〉は「晴れ着らしい印半纏を着てゐる。〈男〉に関しては二一で詳しく考察するが、印半纏という物を着用していることから、〈男〉が鳶や左官、植木屋などの職人業に就いているということが示唆されている。その描写に関して、小泉浩

一郎は前掲の論文において「底辺の庶民」、竹盛天雄は『鵬外・その紋様』（小沢書店 一九八四・七）で「教育のない下層の生活者」と、「男」の社会的地位がけつして高くはないことを述べている。

そして明治一〇年代末から牛鍋が安くてうまい食べ物として認識されるようになったことから、『牛鍋』の時代設定は、早くても明治一〇年代末期頃から作品が書かれた明治四十年代頃のことである、という解釈が可能だろう。

## 一一二

『牛鍋』は三人の登場人物によって話が展開される。夫を亡くした三十前後の〈女〉と、彼女と彼女の死んだ夫の間に生まれた七つか八つの〈娘〉、そして〈女〉の死んだ夫の友達である〈女〉と同年代の〈男〉が登場人物である。この三人が牛鍋屋で牛鍋を囲んでいるところから物語は始まるが、齢三十前後の男女と子供という組み合わせは、一見すると男女を父母とした「家族」に見えないこともない。「死んだ友達の人娘」という記載があつて初めて、〈男〉が〈娘〉の血のつながった父ではないことがようやくはっきりする。

上野千鶴子は『近代家族の成立と終焉』（岩波書店 一九九四・三）の中の「ファミリア・アイデンティティ」と冠された項で、「家族」について次のように論じている。

家族が家族であるための条件は何か—文化人類学は、この問いをめぐって比較文化的な家族の定義に答えようとしてきた。結論から言えば、文化の多様性の前に「家族」の通文化的な定義は、とつづくに放棄されている。養子制度があるところでは血

縁は家族の定義の中に入らないし、アフリカのようにゴーストマリッジ（死者との婚姻）の慣行のあるところでは、死者でさえ家族のメンバーに入る。家族を操作的に定義するために文化人類学がたどりついたミニマムの定義は「火（台所）の共同」、すなわち共食共同体というものである。したがって「別火」が起きたとき、世帯分離（したがってしばしば家族分離）が起きたとみなす。

『牛鍋』の〈男〉と〈女〉の間には婚姻関係が結んであるのか、彼らは法的にも「家族」になりえているのかどうかなどは本文上に記載されていないため、わからない。しかし、上野が言うように「共食共同体」が家族の最小の定義ならば『牛鍋』に登場する彼らは『牛鍋』においては、牛鍋という「火」を囲む「家族」なのである。一見すると「家族」、しかし当事者達からする内情は違い、各々の思いが錯綜しているということが、この物語の面白さを生み出している仕掛けのひとつのように思われてならない。

## 一一一

### ○近代的な〈男〉

小泉浩一郎は前掲の論文の中で、『牛鍋』という作品において「開化」の体現者は言う迄もなく〈男〉である。」と断言している。その具体的な根拠ははつきりとは書かれてはいないのだが、一一一で述べたように牛鍋とは、普及し始めたころは「開明的」な食べ物の象徴であり、それを食することは非常に進歩的な人物であること

を証明するものであった。つまり、開化の象徴である牛鍋を積極的に、かつ「すばしこく」食べ続ける〈男〉こそが、時代に取り残されることのない、近代的人物なのである、ということであろう。

さらに小泉は〈男〉の外見の特徴から、「この「箸のすばしこい男」を、作者は「丈夫な白い歯」と「鋭く切れた二皮目」を持ち、「世に苦み走つたといふ質の（略）顔」の「所有者として設定すること」で女の男への愛の根拠を明かす」と述べている。これらの描写から、〈男〉の容貌の凛々しさは理解できるが、しかし〈男〉の容貌のみが〈女〉から愛を向けられている所以ではないと考える。

〈男〉は「晴着らしい印絆纏」を身につけていることから、職業についていることがわかる。職業業に関しては明治三二年に横山源之助によって著された『日本の下層社会』（一八九九）<sup>4)</sup>に詳しい。横山は明治期の職人の様子について次のように述べている。

職人を大別して二種とすべし。居職人および出職人、これなり。鋳職・下駄・鼻緒：省略（有賀）：煙管・提灯等の職に従事するは居職人にして、大工・左官・石工・瓦葺・ペンキ塗の如きは出職人となす。（傍線有賀）：（有賀中略）職人氣質においても出職人は悉く膾は酢で持つ男は氣で持つ兄貴肌にして、居職人は風采を華奢にしてむしろ商人に近づける傾向あり。これを路上で見ると、出職人は股引・絆天にして足に麻裏草履を突っ掛け、居職人は羽織を着流してゆく。なお仔細に見れば出職人の家庭は妻は一家の主人にて男は家事を顧みること少なく、ために「宵越しの金」なきを一種の名誉とし生計に拘々たらざることはあれども、居職人は常に家にあるを以て一家の生

計に関係し、自からその性情鄙吝なるは多し。故に純然たる職人氣質―日本社会に存する一種の民性はこれを居職人に見るよりも出職人に著し。

家に居ながらにして作業が出来、家を拠点として仕事をするのは居職人、家から出て、得意の出入り先などで仕事をするのが出職人である。出職人の装いの特徴から、〈男〉が傍線部のような職についていることがわかる。

先ほど引用した横山の文には、出職人の「宵越しの金」なきを一種の名誉とし」といった気風のよい人となり書かれている。横山によれば、明治維新以前の居職人と出職人の経済的な格差は、居職人の方が自分で作った物を自らの手で売りさばく場合も多かったため、一日数十銭で雇われていた出職人よりも裕福であったようだが、維新後は、工業化が推進されたことや資本家の間屋が増えたことなどから立場が逆転した。事業家の資格を兼ね備える請負仕事にも着手するようになった出職人もいたようだが、いかに腕の良い職人でも資本がなければ請負に手を出すことは難しく、西川祐子は「近世からあった職人社会が産業の再編成で混乱し、腕のある職人が食い詰めて」、都市の貧民窟に流れてくることも多かったと述べている。（「住まいの変遷と「家庭」の成立」〔女性史総合研究会編『日本女性生活史』（第四巻）東京大学出版会 一九九〇・八）横山は居、出、両職人に対し「ただ資本の勢力は日に盛んにして労働の価値下りつつあるは両者同じき」、「一方に文明は疑々として進みつつあるにもかかわらず、労働は機械のために侵略せられ居る傍ら、旧来より存する職人社会は、年々生活は窮迫を致し、その組織は解体し居るな

り。」と述べ、締めくくっている。

以上のように苦境を強いられていたのは「印絆纏」を晴れ着として着ている〈男〉もまた同じである。しかし彼には職人を表す「印絆纏」のほかにも「折靴」という外見的特徴が描かれている。小泉浩一郎は職人である〈男〉が職人に似つかわしくない、書類を入れて持ち歩くために用いられる「折靴」を持ってきていることに着目し、「飛躍を恐れずに言えば、ここに私たちは数年後に書かれることになる『雁』の先蹤的イメージを見出すことも許されよう。」と述べている。

一九一一年（明治四四）年から一九一三年（大正二）年に書かれた鷗外作『雁』（初出：明治四四・九『スバル』）の重要な登場人物の一人である末造は、学生寄宿舎の小使という立場を利用し金に困っている学生相手に金を貸し始め、ついには高利貸しとして成り上がり、金があれば女を買って意のままにできることを示した男である。末造の人となりは「金の事より外、何一つ考えたことのない末造」といった本文からよくわかる。高利貸し事業が成功し妾としてお玉を囲うようになると、末造は妻のお常や家庭を顧みなくなる。妾を囲っていることがお常の耳に入ると、末造は舌先三寸でお常の気を逸らす<sup>5)</sup>。

経済的な面から言えば、末造は明治維新の荒波にのみこまれず、うまくそれに乗ることができた人物であろう。話を戻すと、書類などを入れる「折靴」を持ち歩く〈男〉も末造のように、時代にのみこまれまいとした「成功」の野望を持っていて、かつ女を軽んじているところも〈男〉と末造の重なる部分として挙げたい。

『牛鍋』の中で〈男〉は〈女〉からの視線を浴び続け、かいがい

しく世話をされているにも関わらず、彼女に対しては一瞥もくれず、

一言も交わさない。もしも、〈男〉が〈女〉のまなざしやかいがいい世話に気がついていて、一度も〈女〉と視線を合わせないのだとしたら、彼は〈女〉の自分への愛を自覚していることを意味する。

〈男〉は牛鍋という食物をほぼ独占し、彼の眼にはそれしか映っておらず、それに向かつてひたすら箸を進めている。この場で食を支配しているのは〈男〉である。それに手を出さず、自分の食を忘れるほど〈男〉の食を補助しているのが〈女〉、〈男〉の手からおぼれをくすねても許されるのは子供である〈娘〉である。この構図は「食」という、生きていくには不可欠な物は男性の手中にあり、女性はその男性の行動を彼的手中にあるものを奪わずに補助しなければならず、しかしその奉仕行動は一方向のもので決して同じものが自分に返ってくることはないことを意味している。

ここまで小泉の〈男〉は「開化」の体現者」で近代的人物である、という論に即して考えてきた。彼は冷静に淡々と、わき目もふらずに開化の象徴である牛鍋を自分の中におさめていく。

## 二二二

〈娘〉に関しては、作品本文中に「七つか八つ位の娘」といった記述がある。

最初、〈娘〉は牛鍋をよそってもらえるのを「待つてゐる。」と書かれている。しかしいつまでたっても、母でさえもよそってくれないことを知り、おそろおそろ牛鍋へ箸を向ける。しかし肉を挟もうとする度に〈男〉から「そりゃあ煮えてねえ」と食を阻まれ続ける。そのうち〈娘〉は〈男〉の目を盗んで小さな肉片や野菜を「すばし

こく」得るようになる。

しかし〈男〉は〈娘〉が「食の争い」に参戦してきたことを別に咎めたり、叱りつけることはしない。〈娘〉に一瞥をくれるだけである。

それは〈娘〉が子供であること、つまり一人前の女ではないから、〈男〉と争うことができ、〈男〉の手中にある牛鍋から食を奪うことを許される、といった解釈ができればよい。

〈娘〉が鍋をつつきだすと、〈男〉の箸は「一層すばしこくなる」と描写されているのに対し、〈娘〉の箸は「すばしこくならう」としている」と描写されている。〈娘〉は〈男〉に何度も食を阻まれ、その度に「驚の目」を彼に向けた。これは初めて彼女が、他人の厳しさに出会った瞬間であろう。この箸の描写は、〈男〉の箸は、世間の厳しさを十分に知り生き抜く術を会得しているということ、〈娘〉の箸はこれからその術を得ようとしているという表象でもある。

しかし彼女がいくらその術を身につけても、女<sup>メ</sup>になつてしまつたら、つまり、女<sup>メ</sup>というジェンダーに区画される段階に位置してしまつたら、もう、男<sup>オ</sup>と争うことは許されず、彼女も母同様、男<sup>オ</sup>の補助にまわり、決して同じように返つてはこない奉仕をしなくてはならなくなるのである。

## 二一三

男は鋭く切れた二皮目で、死んだ友達の一娘の顔をちよいと見た。(本文引用)

この一文から〈女〉の社会的地位が妻ではなく、夫と死に別れた女性—俗に言う寡婦・後家・未亡人—であることがわかる。従来の『牛鍋』論文で〈女〉の「永遠に渴してゐる目」が〈男〉への性的欲望を表す視線であるとされてきた大きな理由のひとつは、〈女〉が夫を亡くしていることが挙げられるだろう。そのことを示すために、日本での「夫を亡くした女」の呼称の変遷の歴史から辿つてみた。

### ○「夫を亡くした女」の呼称の変遷

夫を亡くした女性に関する語は日本語では、同じ意味でも四つも存在している。日本での「夫を亡くした女」の呼称を出現した順に挙げていくと、やもめ・寡婦・後家・未亡人という並びとなる。これは英語では彼女達をあらわす言葉は *widow* の一語のみであることを考えると、きわめて特異である。青木デボラは、夫を亡くした女性をあらわす四つの言葉は歴史的に変化を遂げていったことに着目し、「これらはそれぞれ特別な歴史を持ち、つねに変化する枠組みとして文脈を定義する時代とともにさまざまな意味を含み、そこでは言語それ自身がその本質的構成要素の一つとなっている」と記している。(『日本の寡婦・やもめ・後家・未亡人—ジェンダーの文化人類学』(明石書店 二〇〇九・一一))

江戸末期には、夫を亡くした女性(後家)へのからかいを含んだ性的なイメージが付きまとい始め、それとともに地位が低下の一途を辿り、明治維新を迎え、天皇を頂点とした近代国家を創設するた

めにさまざまな面から家父長制を支持し、民衆にすりこんでいった結果、女性、特に夫を亡くした女性の地位が日本史上最も低下するに至った。具体例を挙げると、財産に対する法的権利を失ったことや再婚をするにも亡夫の家長に許可を得なくてはならなくなったことが挙げられる。

このように法的に明らかに男性以上の束縛を受けることにより、経済的にも性的にも彼女たちにはさらなる抑圧が加わった。

### ○「未亡人」の出現

未亡人は夫を亡くした女性を表す語として最も新しい呼称である。『歴史学事典』第2巻（尾形勇編 弘文堂 一九九四・十）によると「夫とともに死ぬべきなのに未だ死んでいない人」という意で、寡夫の再婚は自由だが、寡婦には夫への殉死を求め、あるいはその緩和された形として寡婦の再婚を禁止するという家父長制社会の価値観にもとづく語である。」と記されている。

青木デボラは、未亡人という呼称が、特に日露戦前後に積極的に使われたしたのは、帝国主義戦争へ駆り出される兵士たちの士気を高めるためといった背景があることを指摘している。

夫という性的支配者を失った未亡人たちは、かつて結婚をしていて、夫との性行為を経験したことがあるだろうということから、男たちを誘惑する危険な人物として見られていた。<sup>6)</sup>「女と子どもとの所属を決めるルール」である家父長制に組み込まれておらず、夫という性的支配者から解放され「性の自己決定権を行使」<sup>7)</sup>できる立場にいる未亡人は、男性の側からすると誰の子を孕むかわからないと

いった危険因子として見られていたのである

### ○「永遠に渴してゐる目」の真意

〈女〉の年齢については「三十前後であろう」といった記述がある。未亡人から性的なイメージが想起される理由のひとつに若さがある。若い未亡人たちは性的な好奇の視線を人々から受けていた。特に〈女〉のような下層の未亡人には経済的困窮が重くのしかかっていた。<sup>8)</sup>

〈女〉は作品の最初から最後まで〈男〉に「永遠に渴してゐる」視線を送り続けるが、何もせずに〈男〉に見惚れていたわけではなく、「酒を注いで遣」つたりと終始〈男〉の世話をしている。何もしていなかったのならば、激しい性欲のために〈男〉に見惚れていた、とも解釈できるが、そうではないのである。そもそも性欲のためだけならば〈娘〉をまず連れてはこない筈である。

この「永遠に渴してゐる目」が見ている先には本文中明確には書かれてはいない死角が存在する。まるで〈女〉が〈男〉のみを見つめているように描かれているが、〈娘〉も視界に入っていたのとは云えない。〈男〉と〈娘〉を引き合わせた理由はただ一つである。〈男〉と〈娘〉が家族として上手にいくかどうかを見ていたのである。〈男〉と三人で家族にならない限り、彼女は「渴し」たままないのである。

以上のことから、従来の「永遠に渴してゐる目」を〈男〉への性的欲望のまなざしであると限定する解釈の根底には、明治期に強化

された、夫を亡くした女性に対する主に性的な偏見がまだに論者たちに存在していることがわかる。つまり「永遠に渴してゐる目」は〈女〉の〈男〉に対する性的な欲望のまなざしであるとして一義的に解釈して結論を導き出す側こそが、〈女〉に対して性的なまなざしを向けていることは間違いない。

### 三一

この項では従来論じられてこなかった「本能」と「進化」の二つの語句を中心に考察したい。

#### ○ 本能

『牛鍋』に於いて象徴的な文章のひとつに「一の本能は他の本能を犠牲にする。」といった文章が挙げられる。これを含め、作中に「本能」という語句は三回出てくる。

まず「本能」の定義だが、C. ダーウィンは「自分の利益になるもの」としている。

この「一の本能は他の本能を犠牲にする。」という一文を〈女〉にあてはめ、以上の私の論に沿って考えると、犠牲にしている「他の本能」は食欲と性欲になる。では「一の本能」は何であろうか。それは〈男〉と法的に婚姻関係を結び、家族となることである。それが巡り巡っては社会的にも経済的にも「自分の利益になる」のであり、〈娘〉の利益にもなり得るのである。

#### ○ 進化

先にも述べたように、〈女〉は目先の食欲や自分の子供の世話ではなく、〈男〉の世話に従事している。これは一見すると利他的だが、巡り巡っては利己的な行動となり得るのである。「人は猿よりも進化してゐる。」という文章は、目先の、生存を左右する食を無視し、未来の「食」を〈男〉から得るために行動する、という動物には見られない行動を表現している文章なのである。

「人は猿よりも進化してゐる。」の解釈はもう一つ存在する。

〈男〉と〈娘〉の食の争いは、作中後半で猿の親子の食の争いにとえられる。〈男〉も母猿も自分の食欲を子供の食欲よりも優先しているが、たまたま自分のおこぼれを子供が口にしても叱らない、という点が共通している。しかし〈男〉と〈娘〉との間には母猿と子猿のような血縁関係はない。それにもかかわらず〈男〉は〈娘〉を叱らない。この箇所での「人は猿よりも進化してゐる。」の文章の意味は、本能の欲求のままに生きる「獣」のような庶民にも、自己を抑制させるような行動をとることもある、という作者の皮肉が込められている。

#### 終

一見家族のように見える三人だが、内情は違い、各々の思いが錯綜している。〈男〉は「疑似家族」にもかかわらず、まるで一家の主のように傲慢にふるまい、食を独占する。〈娘〉は小さな牛鍋屋という空間で大きな世間の厳しさを垣間見る。〈女〉は食欲も忘れて二人の様子を、密かに固唾をのんで見守る。彼らは「家族」では



ないが、『牛鍋』の中では家族である。この構図が『牛鍋』の面白さを生みだしている最大の仕掛けに思えてならない。

もしも三人が「家族」になれる日が訪れても、〈女〉の目は「永遠に渴し」たままに違いない。〈女〉と〈男〉のまなざしは完全に非対称である。〈男〉からまなざしを受けけない限り、彼女の目は永遠に満たされることはない。もうすでに〈女〉と〈娘〉を軽んじている〈男〉の視線が〈女〉を見る日は来ないことは容易に想像がつく。

そして、鷗外の小説の中には、自分の性欲を優先し行動する女、そして庶民の女を「本能的人物」と称す傾向が見られる。しかし「牛鍋」の〈女〉は鷗外の他の作品の「本能的人物」とは違い、特に「本能」につき動かされているような行動は起こしてはいない。それは彼女が「未亡人」や「母」といった社会的なものに縛られていることが、「本能」のおもむくままに行動できない理由のひとつであることも補足したい。

注(1) 『決定版三島由紀夫全集(27)』(新潮社二〇〇三・二)

- (2) 三好・小泉論文以外には、福田育弘「構造としての飲食 魯文の『安愚楽鍋』から鷗外の『牛鍋』へ」(『学術研究 外国語・外国文学編』早稲田大学教育学部二〇〇五・二)、竹盛天雄が『鷗外・その紋様』(小沢書店一九八四・七)の中の『木霊』と『牛鍋』、『電車の窓』の実験」という章で、小堀桂一郎がほんの数行ではあるが「散文様式の藝術的完成―森鷗外とG・フロベール」(佐々木昭夫編『日本近代文学と西欧…比較文学の諸相』(翰林書房一九九七・七))の中で「牛鍋」について触れている。

(3) 坂井健「牛鍋とはどんな鍋だったか―『安愚楽鍋』を中心に―」(『京

都語文』佛教大学国語国文学会 二〇〇二・一)を参考・引用(鍵括弧部)した。

(4) 初版は一八八九年であるが、岩波書店より一九四九年五月に改版されたものを参考・引用した。

(5) 『雁』拾二に「お上さん(有賀注・末造の妻お常)の頭は霧が掛かったように、ほうっとしているが、もしや騙されるのではあるまいかと云う猶疑だけは醒めている。それでも熱心に末造の顔を見て謹聴している。今社会の制裁と云うことを言われた時もそうであるが、いつでも末造が新聞で読んだ、むずかしい詞を使つて何か言うと、お上さんは気おくれがして、分からぬなりに屈服してしまうのである。」といった文章があり、末造がお常を軽んじて見ていることは明白である。

(6) 大久保健治「文学的欲望の行方―日露戦争期における〈未亡人小説〉の消長―」(日本近代文学会『日本近代文学』三省堂 一九九九・五)

(7) 上野千鶴子『女ざらい―ニッポンのミソジニー』(紀伊国屋書店 二〇一〇・一〇)

(8) 三宅やす子『青踏』の女たち・第19巻、「未亡人論」(不二出版 一九八六・一)

(9) チャールズ・ダーウイン著・八杉龍一訳『種の起原』(岩波書店 一九九〇・二)

鷗外はドイツ人のお雇い外国人講師フランツ・ヒルゲンドルフ(Franz Dorn)に進化論を習っていた。そのことがわかる講義ノートが文京区立鷗外記念本郷図書館に現在も保存されている。

その他参考文献

日本大辞典刊行会編集『日本国語大辞典』(小学館 一九八〇・二)

以上参考・引用文献著者の敬称は略した。